



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry

72

目次

Jul. 2, 2020

Important Notice 2

開催中止：第37回有機地球化学シンポジウム

奈良岡 浩

People 3

3年間のポストドクを終えて思うこと

風呂田 郷史

Information 6

日本有機地球化学会 2020年度 年会費のお支払いについて

Announcement 7

ROG36 巻へ論文を投稿しましょう！！

編集後記 8

Important Notice

日本有機地球化学会々員 各位

新型コロナウイルス感染の影響が大きい中、会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。所属機関において、未だ研究活動が制限されておられる方も多いと思います。

昨年の総会およびホームページでもお知らせしていますように、本年9月2～4日に茨城県つくば市において、産業総合技術研究所のお世話で第38回有機地球化学シンポジウムを開催する予定でした。しかしながら、今後のウイルス感染がどのように推移していくか判断が難しく、先日の理事会において、本年のつくば市における有機地球化学シンポジウムを来年に延期することに決定いたしました。参加・発表・交流を楽しみにされておられる方も多いとは思いますが、何卒ご理解いただきますようお願い申し上げます。来年の開催予定につきましては、これから産業総合技術研究所と理事会で協議の上、決定させていただき、ニュースやホームページ上で案内させていただきます。

本学会が法人化されて初めてのシンポジウム開催予定でしたが、延期となり残念です。しかしながら、学会の定款により、6月30日に事業年度が終了後、3ヶ月以内に総会を開催する必要があり、9月上旬頃にオンラインで開催させていただきます。詳細は後ほどニュースやホームページ上でお知らせさせていただきますが、ご参加または委任状の提出をお願いいたします。

なお、本年はシンポジウムを開催しないかわりに、11月下旬～12月中旬の1日に若手・大学院生を対象としたオンライン研究発表会を開催する予定です。10数名の口頭発表と議論を全国に繋いで行いたいと思っています。現在の厳しい環境下ではありますが、研究活動を維持しつつ発表会に備えていただければ幸いです。オンライン発表会開催の詳しい情報につきましてはなるべく早い時期にニュースやホームページ上でお知らせいたします。

早期にこの困難な状況から回復して、通常の研究活動ができることを祈るとともに、会員の皆様のご健康とご活躍を願っております。

日本有機地球化学会々長 奈良岡浩

People

今回は、産業技術総合研究所の風呂田郷史さんにご寄稿いただきました。

「3年間のポスドクを終えて思うこと」

産業技術総合研究所 風呂田郷史

3年間のポスドク期間を終え、2020年4月より産業技術総合研究所（地圏資源環境研究部門、燃料資源地質研究グループ）の研究员になりました、風呂田郷史です。この度は、News Letter への執筆機会を頂きましてありがとうございます。簡単ではありますが、自己紹介を兼ねて学生からポスドクまでの経験を紹介させて頂ければと思います。

私は2006年に千葉県内の幕張総合高校を卒業し、1年間の浪人生活を経て、2007年に北海道大学理学部へ入学しました。確固たる目標で北海道大学を受験したわけではなく、「何がしたいか分からない」葛藤の中で、学科分属を先延ばしにできることを理由に北海道大学を受験しました（当時は理学部で入学し、2年の後期に学科分属）。曖昧な気持ちで進学した若者が勉学に打ち込む訳もなく、入学後は浪人時代に押さえつけていた欲望を解放するようにやりたい事を好きなだけやる生活をしていました。

そのような生活の中で、とりわけ楽しかった事が住んでいる地域に秋祭りを立ち上げる活動でした。自分達で秋祭りを作るために初めに行ったのが「コネづくり」です。自分達にはお祭り作りのノウハウも、資金も、機材もない。自分達でお祭りを実現させるためには、ノウハウを教えてくれ、活動の後ろ盾になってくれる方々の協力がどうしても必要でした。

コネを作るために、友人達と北海道中のお祭りを巡る旅をしました。この旅が、地球科学科への分属を決めるきっかけとなります。友人達との旅はそれだけでも十分に楽しかったのですが、車窓から見える北海道の地形の雄大さやバリエーションの豊富さに感動しました。札幌から積丹半島へ向かえば険しい海岸線が続き、夕張川沿いには「ザ・地層」と言わんばかりの砂泥互層が続き、山へ向かえば大地が噴煙を上げている。旅の道中で「地質学を勉強したら旅が楽しくなるかもしれない」とふと思ったことが決め手となり、地球科学科へ進学しました。

この思惑は的中し、地質学を勉強してからは一味違う旅行を楽しむことができました。積丹の険しい海岸線が海底噴火に特異的な地形であること、自分が「ザ・地層」と思っていた風景が海底地滑りで形成されたこと。目の前に広がる風景から過去の地球の様子を妄想する旅行は、ただ風景を眺めていた以前の旅行とは別物でした。旅自体の目的も地形や地層の見学にシフトしていきます（写真1）。



写真1 友人と北海道せたな町を訪れた際の写真（筆者は一番左。一番右は現在 JAPEX で活躍する大谷猛亮氏。）。学生の頃は北海道の様々な地層を巡る旅行を楽しんでいました。多くの旅行を楽しんだことが、地質学研究を始めた原点です。

卒業論文のテーマも旅行の延長線で考えました。指導教員であった沢田健准教授に「何がしたい？」と聞かれ、「フィールドワークがしたい」とだけ答えた気がします。結果的に、夕張地域に分布する中新統川端層をフィールドとした野外調査から卒業研究をスタートさせました。

沢田研究室では、やりたいと思ったテーマを一通りやらせてもらいました。一人で山に籠もることも認めてもらいましたし、野外調査中に思いついた新しい研究テーマにも挑戦させてもらいました。国際学会にも頻繁に連れて行ってもらい、IODP への参加を希望した時も快諾してもらいました。伸び伸びと自由奔放に研究ができる環境に身を置けたため、自分が興味を持った地質学研究のほとんどを経験できたと思っています。気がついた時には学位を取得していたと感じるぐらい、ただただやりたい事をやらせてもらっていた気がします。そのような研究環境を与えて下さった沢田健准教授や当時のメンバーには本当に感謝しています。

やりたいことをひたすらやっていた学生生活とは変わり、学位取得後は自分の興味とは異なる研究プロジェクトにポスドクとして参加してきました。自らその道を選択したというよりは、ある人の助言で下した決断でした。ポスドクの職を探していた私は、JAMSTEC が「ニホンウナギ仔魚の人工餌料開発」に関するポスドク研究員を募集していることを紹介してもらいます。この紹介を聞いた時は、すぐに断ろうと思いました。ずっと地質学をやってきたこともあり「自分のテーマはずっと地質学。水産学研究は自分には関係ない。」と思ったからです。しかし、紹介先にこの事を伝えたところ「学位取り立ての若者が、自分の一生の研究テーマを決めるな。新しいことに挑戦して、もっと広い世界を見て、それから決めなさい。」と助言されます。衝撃的でした。自分が今までやってきたことの延長線でしか物事を考えておらず、勝手に自分の殻に籠もり、新たな可能性までを否定していたことに初めて気づかされました。この助言の後、新しい研究分野に飛び込むことを決め、JAMSTEC の採用試験に挑戦しました。面接の前日は、地質学から離れる不安感と新しい可能性へのワクワク感に挟まれた複雑な感情でよく眠れなかったことを覚えています（写真 2）。



写真 2 JAMSTEC の採用面接前夜に食べたうな井（採用面接で使うスライドの「つかみ」用に撮影）。地質学から離れることへの不安感と新しいことに挑戦するワクワク感に挟まれた複雑な心境でした。深夜の野毛で、いろんな事を考えながら食べた思い出深い一杯です。

JAMSTEC での新しい研究分野への挑戦は私にとって貴重な経験となり、研究の幅を大きく広げるきっかけとなりました。頂いた助言の通りでした。異なる研究分野の知識のインプットは、自然現象を捉える新しい視点を提供してくれたと思っています。例えば、生態学や生理学に関することを多く考えていたおかげで、学生のころに学んだ堆積学的な現象の多くを生物活動と結びつけて捉えるようになりました。また、分析法開発の研究に関わったことも大きかったです。新しい分析法を開発する研究は敷居が高いと思っていましたが、分析化学に関する多くの知識を学ぶことができた今は、研究の選択肢として捉えることができます。

お手本にしたいと思える多くの研究者と一緒に仕事のできた経験も大きな財産となっています。日常的な研究の議論はもちろん、たわいもない、ふとした会話の中からのその人の考え方や哲学を学んでいたように思います。今でも、迷った時は「あの人ならどうするか？」

と考えることが多いです。日常でも、研究を考える上でもです。

紹介したように、お祭り作りのための旅行から始まった私の研究は地質学からニホンウナギの研究(水産学)へと変化してきました。加えて、JAMSTECの退所後は産総研にて微生物学の研究にも関わらせてもらいました。転々と専門を変える経歴は、1つの研究テーマを突き詰める「一流なスタイル」とは対象的な「雑食的なスタイル」だったと思っています。もちろん褒められるような経歴ではありません。多くの研究者の目には「ポリシーのない駄目な奴」と映っていたことでしょう。実際、そのような言葉をかけられた事もありますし、自身のコンプレックスであったことは間違いありません。

しかし最近、雑食的な経験ができたことを自分の「強み」として捉えることができるようになってきました。全然違う経験をしてきたからこそ、自然現象を多角的な視点で見れるようになったと思っています。同時に、そこから見つけた研究課題を突破するための分析法開発に挑戦する知識も身につけることができました。学生のころに地質学を学ぶことで旅行が楽しくなったのと同様に、ポスドクとして新しいことに挑戦した経験が今の自分の研究をより有意義にしてくれています。

もし、この記事の読者の中に学生さんがいて、今の研究テーマに悩んでいるのであれば、思い切って新しい分野に飛び込んでみることをお勧めします。未経験の研究分野に飛び込み、その分野の研究テーマを集中して行うことで(片手間ではなく)、新しい思考回路を自分の物にできるはず。その後、自身の研究テーマを再度見直せば活路が見えてくるかもしれません。逆に、新しく飛び込んだその分野で、これまでの経験からブレークスルーを起こせるかもしれません。一流にしか見えない世界があるように、多くのことを経験した雑食にしか見えない世界があると、私は信じています。

IODPの国際会議で、ある海外の若手研究者が分散している研究プロポーサルの連携を訴えるために発言した「Everything is connected」というフレーズが強く印象に残っています。自然科学は効率的に理解を進めるために、様々な学問体系へと細分され発展してきました。一方で、最終的には全てが繋がった自然の全体像の理解が求められます。私がやってきた研究も、バラバラのように見えて繋げる方法があるのだと思います。と言うより、実は今、これまでの経験を全て繋げることで成立する少し大きな研究像の輪郭がぼんやりとですが見え始めています。その研究成果もちかいうちに有機地球化学会で発表できるかもしれません。まずは結果を出せるよう、これまでの研究や経験を上手に繋ぐ方法を考えていきたいと思っています。

現在に至るまでに多くの方々のお世話になりました。指導教員である北海道大学の沢田健准教授には、研究のいろはを教えて頂いただけでなく、自由奔放に研究できる環境を長年にわたり提供して頂きました。大河内直彦プログラム長や小川奈々子主任技術研究員をはじめとしたJAMSTECの皆様には、世界をリードする研究に挑戦する難しさと楽しさを教えて頂きました。若手ながら研究プロジェクトを牽引する産業技術総合研究所の眞弓大介主任研究員には、プロジェクト運営のお手本を見させて頂いたと思っています。それ以外にも、ここには書き切れない多くの方々に支えてもらって頂きました。皆様から頂いた御恩は、次世代の若手研究者のサポートという形で返していきたいと思っています。

Information

一般社団法人 日本有機地球化学会 2020 年度年会費のお支払につきまして

2019年11月1日の一般社団法人化にともない、本会の会計年度は従来の1月—12月から、7月—翌年6月に変更されました。つきましては以下の会員区分に従いまして、2020年度年会費のお支払いをお願い申し上げます。

皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

正会員： 年額 3,000円

学生会員： 年額 1,000円

<年会費支払い方法>

シクミネットによるオンライン決済システム (<https://m6.members-support.jp/ogeochem/>)

(メニュー → お支払い → 会費支払い)

(コンビニ、ペイジー、クレジットカードがご利用いただけます。)

【ご案内】

- (1) 会員ID及び初期パスワードがご不明な場合は、事務局までお問い合わせください。
- (2) 複数年前払いをされている会員様で不足分が生じる場合には、その支払いについて、個別にご連絡します。
- (3) 過去に未払いがある会員様へは、個別にご連絡します。

本件に関するお問い合わせは、
日本有機地球化学会事務局 office@ogeochem.jp
まで、よろしくお願いいたします。

一般社団法人日本有機地球化学会 事務局
(管理委託：会員管理サービス「シクミネット」)

日本有機地球化学会 会員専用WEB <https://m6.members-support.jp/ogeochem/>



Announcement

ROG 36 巻への論文投稿：

日本オリジナルの有機地球化学の研究成果を積極的に公表しましょう！

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、冊子の発行およびwebサイトに公開しております。ROG35巻 (Vol. 35) 1~2号(Nos. 1-2)は、昨年12月に発行され、論文3編(うち英文論文2編)、技術論文1編、英文総説1編の計5編が掲載されました。表紙レイアウトは、法人化されたタイミングに合わせて刷新し、デザインは掲載された英文総説の著者である大阪市立大学 中村英人さんが作成されました。2020年巻であるROG36巻(Vol. 36)は、1号(No. 1)は2020年9月頃、2号(No. 2)は2020年12月頃にweb公開する予定で進めております。冊子体は昨年同様に12月頃の発行を予定しております。皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしております。

ROGの論文のカテゴリーは、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)、5) 議論(Discussion)です。新設した「議論(Discussion)」にも、ぜひ投稿ください。また、有機地球化学会シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、学会webページおよびROG Vol.35巻末の投稿規定をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。ROGは研究分野・領域のボトムアップをより重視した性格の雑誌であり、日本の有機地球化学の技術者・研究者が提案する挑戦的・草分け的なアイデアなどを積極的に掲載したいと考えております。様々なアイデア・企画を編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF添付ファイルによる電子投稿： sawadak@sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

北海道大学大学院 理学研究院 地球惑星科学部門

沢田 健 編集委員長宛

(TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394)

編集後記

コロナ禍により研究の進め方やコミュニケーションの取り方に変化が訪れました。ニュースレターやHPなどの情報共有ツールも変革が必要かもしれません。何か良いアイデアがあれば是非お伝え下さい（金子）

今年のシンポジウムの延期はとても残念ですが、11-12月のオンライン研究会にて皆さまにお会いできることを楽しみにしております。（菅原）

今後もテレワークやweb会議が増えていくことと予想されます。自宅での研究環境についても良いものがあれば情報共有できる場があると良いですね（中田）。

発行責任者 日本有機地球化学会会長 奈良岡 浩
〒819-0395 福岡市西区元岡744（ウエスト1号館A棟5階 W1-A-529）
九州大学 大学院理学研究院地球惑星科学部門 & 惑星微量有機化合物研究センター
(TEL) 092-802-4216 (FAX) 092-802-4208

一般社団法人日本有機地球化学会 事務局
〒060-0819 北海道札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学 低温科学研究所 同位体物質循環分野
事務局長 力石 嘉人
Phone : 011-706-5472（直通）
E-mail : office@ogeochem.jp

編集者 金子 雅紀（産業技術総合研究所）、中田 亮一（海洋研究開発機構）、
菅原 春菜（宇宙航空研究開発機構）：
e-mail: rog_nl@ogeochem.jp